

平成 30 年 3 月 9 日（金）

ないじえる芸術共創ラボ 古典インタプリタ日誌 「デジタル発 和書の旅 湯とアートが鳴子で出会う」 山村浩二さん×木越俊介先生

3月9日に鳴子温泉早稲田棧敷油にて行った「デジタル発 和書の旅 湯とアートが鳴子で出会う」（共催：凸版印刷（株）／大崎市）では、AIR としてないじえる芸術共創ラボにご参加いただいている、アニメーション作家の山村浩二さんにご登壇いただき、古典籍を参照しながら、当館教員の木越俊介先生（当館准教授）と共に、ご関心の在りどころや現在の取り組みについてお話しいただくワークショップを行いました。



山村さんは元々絵と文字の関係にご関心をお持ちで、ご自分でヨーロッパの古い絵本を集めておられ、国文研が所蔵する古い絵本にもご興味を示され、「ないじえる」の事業にご賛同くださいました。

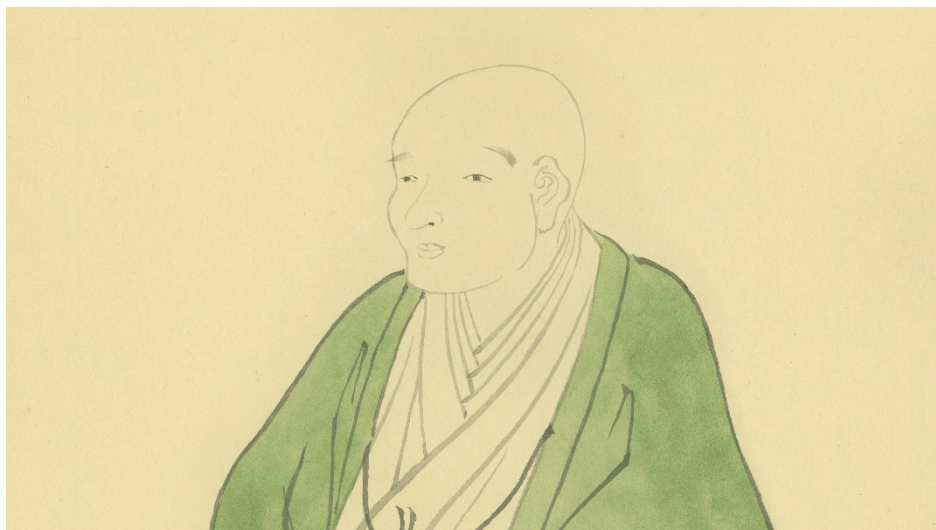
現在、“古典における夢の表現”をテーマにアニメーション作品を創作しておられます。その作品のモチーフとなったのは、江戸時代の絵師・鋏形蕙齋（くわがたけいさい）が描いた『略画式』という作品でした。

【鋏形蕙齋『略画式』の出会い】

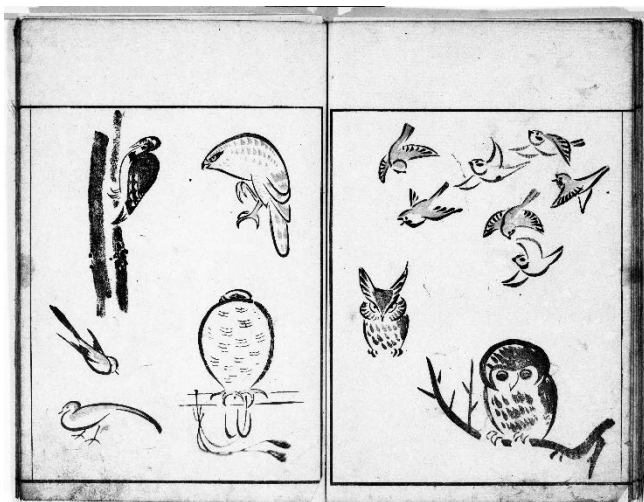
鋏形蕙齋：江戸時代中～後期に活躍した画師。またの名は「北尾政美（きたおまさよし）」。
1764～1824。13歳で北尾重政に入門、黄表紙の挿絵などを描く。31歳で津山藩の御用絵師となる。

平成 30 年 3 月 9 日 (金)

鋏形蕙斎肖像 (山村氏画) © Yamamura Animation



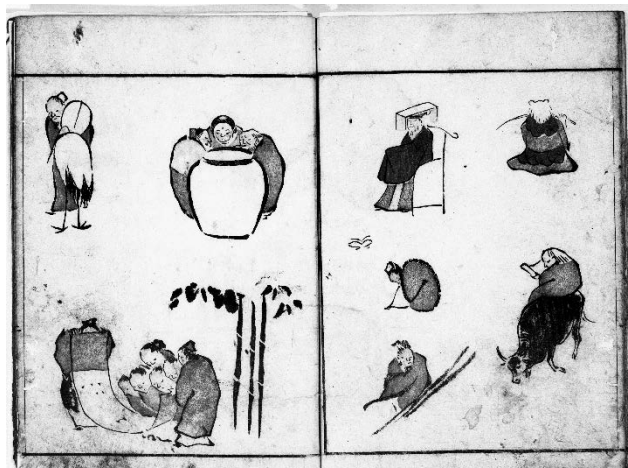
『鳥獣略画式』: 1795 年刊。鳥や動物の形を省略し、簡単な線で描いた絵の手本。他にも『人物略画式』『草花略画式』『山水略画式』などがある。北斎はこれを真似て『北斎漫画』を描いたといわれる。



『鳥獣略画式』

国文研蔵。請求記号：ヤ 8-127

(<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200007686>)



『人物略画式』

国文研蔵。請求記号：ヤ 8-123

(<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200007682>)

平成 30 年 3 月 9 日（金）

山村さんはフランスのご友人から鋏形蕙斎の『略画式』の復刻版を贈られ、その魅力に惹かれていたといいます。

『略画式』は細かな線を省略した絵で構成されています。一見シンプルなので描きやすそうに思えますが、細部を略しているにもかかわらずそれらしく見えるのは、蕙斎に相当な力量があったからだそうです。

山村さんは、蕙斎の人生、画業にも惹かれてゆきます。

蕙斎の作品について調べるうちに、可愛らしいタッチの『略画式』とは対照的に、細かい部分まで描き込んでいる『江戸一目屏風図』(<http://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/86296>)に注目されました。現在東京スカイツリーの展望台に複製が展示されており、わざわざ見に行かれたそうです。

この屏風は、「鳥の目になって見ているように」、上空からの視点で江戸の町の様子を描いたものです。



この描写方法は、後に葛飾北斎が模倣し、風景画を制作しています。

当時も現在も人気のある北斎ですが、実は様々な蕙斎の試みに倣って作品を描いており、蕙斎は「北斎はとかく人の真似をなす。何でも己が始めたることなし」という言葉をのこしています。

このことについて山村さんは、町絵師であった北斎に対して蕙斎は津山藩お抱え絵師、立場上余裕があったが故

の発言ではないかと話しておられました。

【『略画式』を模写する】

山村さんは、今回のアニメーション創作にあたり、『略画式』の複製本を隣に置き、原寸大で模写されたそうです。

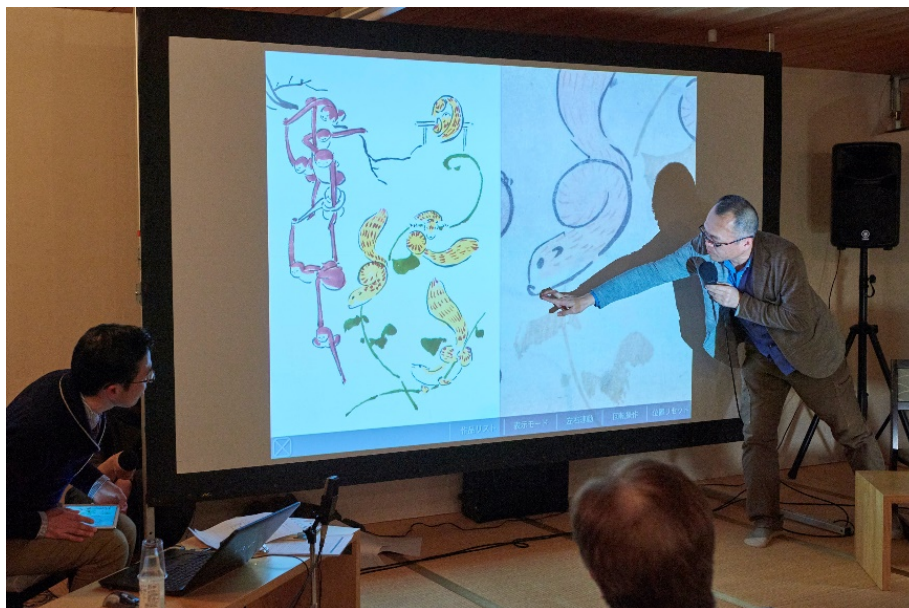
これほどシンプルなのに、なぜ描かれた動物たちが生き生きしているのか。山村さんは、模写の過程でその秘密に迫ってゆかれました。

平成 30 年 3 月 9 日（金）

そのひとつが筆遣いです。

ひと筆で描いているように見えて、実は何回か筆を置きなおしていることを指摘されました。なるべく最小限の筆で描くために、まるで習字のように止めや払いを巧みに使い分けて細部を表現しているのです。

しかも筆順までわかるのだとか……何度も模写し、蕙齋の追体験をされた山村さんならではの発見です。



そしてもうひとつの秘密が、観察と写生です。

たとえば完全にデフォルメされているように見える牛の絵は、角（カド）を取ることで肩甲骨などを表現し、それが立体感へと繋がっています。

このように描くには、牛の骨格をよく理解し、想像したうえでなければなりません。

よくよく観察し、写生を行った積み重ねがあるのだらうと仰っていました。

一方で、象の絵は骨格が理解できておらず、イラストのような印象です。実物ではなく、絵手本を見て描いたのだらうとのこと……そんなことまでわかってしまうのですね！

【古典における夢】

山村さんは、「ないじえる共創ラボ」に参加された当初より、古典における夢の表現に関心を抱いておいででした。

古典作品のなかでは、夢は個人のものではなく、他人と共有するものとして登場します。

たとえば愛しい相手が夢に現れるのは、相手も自分のことを思ってくれているからだという考えがあるのです。

平成 30 年 3 月 9 日 (金)

山村さんは、共同体としての夢の捉え方を考えることで、日本人のアイデンティティを理解することにつながるのではないかと考えておられます。

また、絵画のなかでの夢の描写方法にもご興味をお持ちです。

たとえば江戸時代後期の大人向け絵本・黄表紙の『金々先生栄華夢』(恋川春町作、1775年刊)の冒頭には、うたた寝をする主人公が描かれますが、その首のあたりから吹き出しのような線が出ており、その中に夢の内容が描かれます。

『金々先生栄華夢』国文研蔵。

請求記号：99-132-1～2 (<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200015145/viewer>)



山村さんは国文学研究資料館に何度も足をはこばれ、夢の絵画表現について、様々な古典籍をご覧になりながら、当館の教員と話を重ねてこられました。

そのなかで特に注目されたのは、上田秋成『雨月物語』(1776年刊)に収められた「夢応の鯉魚(むおうのりぎょ)」という作品でした。

「夢応の鯉魚」は、絵を描くことが得意な僧侶が主人公の物語で、夢が重要なモチーフになっています。

【アニメーション作品「蕙齋、夢見の絵／KEISAI, Dreamings' Drawings」予告編・世界初公開】

このようなご関心や、実際に触れた古典籍からインスピレーションを得たことで、蕙齋を主人公としたアニメーション作品の構想がひらめき、その途端ストーリーが出来上がったそうです。

平成 30 年 3 月 9 日 (金)

イベント当日は、現在創作中の作品の予告編が世界で初めて公開され、会場は大きな興奮に包まれました。

「蕙斎、夢見の絵」 KEISAI, Dreamings' Drawings

概要：

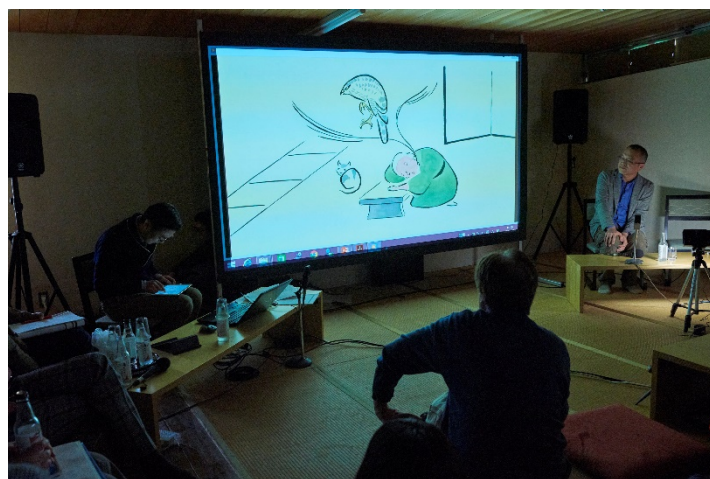
鋏形蕙斎紹真は、江戸中期に実在した画家で、蕙斎を雨月物語「夢応の鯉魚」の主人公に見立てた短編アニメーション。

あらすじ：

蕙斎は日頃から鳥獣を観察している。観察しながら、自分と鳥獣を一体化して妄想の世界に入り、様々な鳥獣に自分が同化することで、動物たちの所作を生き生きと描くことができる。

夜、蕙斎は夢のなかで、鷹になって空を飛び、鷹の視線で世界を見る。目が覚めた時、「はたして自分は鷹になった夢をみていたのか、それとも今の自分は鷹が見ている夢なのか」とつぶやく。

またある時、鯉になる夢を見た蕙斎は、池で泳いでいると、漁夫に釣られ、城内の台所に運ばれてしまう。(了)



平成 30 年 3 月 9 日 (金)

原画 © Yamamura Animation



完成画 © Yamamura Animation



【創作秘話をうかがう】

ワークショップ後半は、「ストーリーボード」と呼ばれる、アニメーションの元になる絵と、そのモチーフとなった『鳥獣略画式』（凸版印刷によるアーカイブ映像）とを比較しながら、作品創作秘話をうかがいました。

「蕙斎、夢見の絵」は、そのほとんどが『鳥獣略画式』『人物略画式』に収められる絵から構成されています。山村さんはその複製を傍らに置いて模写されたそうですが、アニメーションにするには、何枚もの絵を描いて動かす必要があります。

『略画式』に載っていないポーズや角度を想像しながら、動きに必要な絵を描いていかれ

平成 30 年 3 月 9 日（金）

たのだそうです。

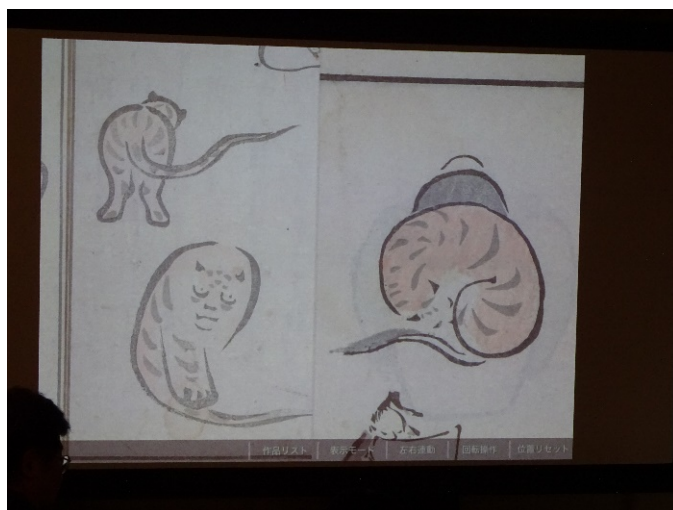
たとえば作品の中で、虎が振り向く場面があります。

この虎は、『略画式』に登場する 3 匹の虎がモチーフとなっています。

この虎を動かすには、30 枚程の絵が必要となるそうなのですが、前と後ろから描いた虎はあっても、横を向いた虎はいません。

山村さんはこの虎をよく観察し模写する過程で、最初に「これは同じ虎だろうか？」と疑問に思っていた 3 匹の虎は、蕙斎の中に描き方のパターンがあり、3 つのパターンで描かれた 1 匹の虎であると気づきました

そこで山村さんは、「蕙斎ならどんなパターンで横顔の虎を描くだろうか」と想像しながら、横を向いた虎、斜めを向いた虎……様々なポーズの虎を描き出していかれたのだそうです。



それは、実際の動物を立体として把握したうえで描く蕙斎の画業を、追体験することでもあったといいます。

また、模写して理解することで、見逃していたディテールにも気づくことができたそうです。

たとえば、イタチは頭から 3 画で描いているそうなのですが、いったん筆を止めることによって鼻の存在を認識させていることに気づかれたそうです。

また、空間の捉え方や筆の勢いにも自ずと注目するなかで、一見単純に見える『略画式』の絵にボリュームがあり、蕙斎の、対象のあるべき姿を捉えようとする姿勢を再認識し、平面的でイラストっぽい印章を受ける北斎の作品との違いに気づかれたそうです。

ほかにとっても面白かったのは、目の描き方についてのお話でした。

山村さんいわく、目の描き方には描き手の性格が出るのだとか……絶妙に可愛い表

平成 30 年 3 月 9 日 (金)

情をしている蕙斎の動物たちをご覧になり、蕙斎は素直でてらいのない人だったのだろうと思われたそうです。

作品の分析から、蕙斎の人となりまで想像されるようなお話でした。



また、描いていて楽しい点と難しい点についてもうかがいました。

山村さんは、描いている作品に没入する、いわゆる「憑依型」なのだとか。今回は蕙斎の可愛らしい動物たちを描き、また、蕙斎が動物たちを楽しく観察している様子を思い描きながら、ニコニコと楽しい気分になったそうです。

一方、蕙斎の筆の迷いのなさについてゆくのが大変だったそうです。何枚も描くうちに、段々と蕙斎の線に近づいてきたと思うと仰っておられました。



蕙斎の追体験をされた山村さん。

絵について専門的見地からのお話をうかがうとともに、「夢」というテーマと様々なモチーフがいかにか結びつき、形にしてゆこうとされているのかについてお聞きしました。